

九 精悍古靱太夫（初代）

劇場で惨殺された

大阪靱敷津橋西の裏長屋に住む盲人按摩の手を引いて行く子供、こんな親を持つた八歳の少年が、後の初代古靱太夫。「孝子彌七」と稱せられた。（古靱本名本村彌七）

貧苦と戦つて撓まず、十一歳から靱太夫について難修行、負けず魂は既に少年の時から培はれた。法善寺席で玉造の人形で、忠丸を語つて驚かしたのが十一歳。

東京で久しく修行、二十幾年ぶりで歸ると、既に故師靱太夫の名を襲いだ二代目が出来てゐた。そこで靱小太夫の自分の名を改めて、靱以上の古靱太夫となつて鬱氣を散じた譯。

文樂では越路と競争、越路は聲で歌ひ古靱は情を語つたが、時利あらず、駿馬は憤つて文樂を後足で蹴つての脱走。他の劇場に疎つて挑戦、意氣軒昂。

他面の古靱は、苦勞人だけ人情に厚いが、精悍な性格に隠れてちよつと見には判らない。明治十一年二月廿四日御靈社内表門席の千秋樂の夜、大道具の梶徳（古靱の幼友達）に惨殺されたのも、全く悲しい誤解からで、表看板の意地つ張りが傲慢冷酷に見え、樂屋での實際の人情

家が梶徳の眼には入らなかつた。

小身短軀、尻當てを高くし、小さい見臺を前にして傲然として語る、感に入らぬ客を、にらみ付ける癖がある、小さい男の準のやうな剽悍な態度、誤解されるやうに出来てゐる。

五十二歳でこの世を去つたが、大阪での興行は僅に八年間しかやつて居らぬ。若し十年の餘命があつたら、無論越路の勁敵で、面白い白兵戦が見られただらう。

大阪の洪水、鹽に乗つて河を渡つて芝居へ通うた。

竹戸槌を擴聲器として呶鳴つたなどの奇行も鮮くはない。生地靱の有名な陶器神社建立にも、隠れた篤行の美談もある。

だが、既にいろいろのものに書いたから略して置く。

劇場で殺された實相實況は、當時の目撃者から聞へ



古靱殺の一救刷